

文学部長

高岡 貞夫 教授



↑ 生田 4 号館 5 階の研究室隣のベランダで生田緑地を背に

「創造は 憧れから説」 について

たかおか さだお

1964 年生まれ。東京都立大学大学院理学研究科博士課程中退。博士(理学)。専門は自然地理学。著書に『自然地理学』(共著 ミネルヴァ書房)、山好きの仲間と一緒につくった『百名山の自然学』(古今書院)や『図説 日本の山』(朝倉書店)など。

創造は憧れから説?

創造や発明は失敗から生まれるとか、必要から生まれるとかいうけれど、憧れからも生まれると私は考えている。これを大げさに「説」と銘打って、冗談半分に「創造は憧れから説」と呼んでいる。呼んでいるといっても、この「説」を披露するのはこれが初めてなので、誰も知らない個人的な「説」である。ここでいう憧れとは、ある物や状態に心が強く惹かれることを指し、創造とは物でもアイデアでも状況でも何か新しいものをつくり出すこと全般を意味している。

文学部では卒業論文が必修であり、4 年間の学生生活の中で最大級の創造性が求められるのが卒論である。上記の「説」は、卒論に取り組む学生たちの姿の観察から生まれた。この学生たちの創造と憧れの関係の一例を記そうと思うが、その前に憧れを頼りに歩んできた自分のことに触れさせていただく。

「自主オープンキャンパス」に出かける

私の高校時代の成績は全体的にパツとせず、なかでも中学まで得意だった数学の成績はとても不安定で、いわゆる赤点を取ったことも一度あった。普通

なら理系の進路をさっさとあきらめて文系の進路を考えるとところであるが、子どものころから好きだった地学の勉強が楽しく、大学や大学院に進んでしばらくこの分野を学びたいと思っていた。地学を学ぶには理系の学部に進学することになるので、数学とは渋々 3 年間つき合ったが、最後まで苦手意識をぬぐえなかった。

こんな自分の進学先はどこが良いのであろうか。私が高校生の頃は、現在各大学が夏休みなどに行っているオープンキャンパスなどという催しはなく、インターネットも一般には全く普及していない時代だったので、大学での研究や教育に関する情報で入手できるものは限られていた。そこで、いくつかの大学に出かけてキャンパス内を歩き、学食で食べながらこっそり学生たちの会話に耳を傾け、理学部棟の中に入り込んで廊下を歩きまわり(不法侵入!)、ドアが開いたままの研究室があれば横目で覗き(全くの不審者!)、一人勝手に「自主オープンキャンパス」を敢行した。

理学部地理学科へ進む

しかしこれでは飽き足らず、高校の地学の先生に

紹介してもらって、ある大学の教授と別の大学のポスドク（大学院を終えた研究員）を訪ねていき、大学における地学分野の研究のことなどについて話を伺う機会をいただいた。そうしたことを通じて知ったのは、地学研究の中には数学が苦手でもやっているものがいくらでもあること。そしてまた、理化学的な観点だけでなく人間や社会のこととの接点も含めて地学的なことを研究する分野として自然地理学という学問があることもわかった。さらに自然地理学の研究者層が特別に厚い大学が日本に2校あることを知り、そのうちの1校を志望校に決めた。

高校の地学の先生には「大学で地学とか地理学なんて専攻したら就職はできないぞ」と忠告されたが、そう言いながら笑っている先生の眼は、就職の不安などに左右されずに好きな分野を学ぶのがいかに楽しいことであるかを教えていた。実際、大学生・大学院生として過ごした9年半の年月は全くその通りであった。

理学部から文学部へ

その後、教員生活も含めて15年間を過ごした理学部を後にして専修大学の文学部にやってきたのが20年前のことである。地理学は複合分野なので、大学によって理系の学部にあったり文系の学部にあったりするが、専修大学では文学部に置かれている。理学部から文学部への異動はいろいろなカルチャーショックもありはしたが、共通点もまた大いにあることに早々に気がついた。それは、一見役に立つかどうかわからないようなことに熱中して探求を続けている教員や院生や学生がたくさんいるという点である。文学部不要論がいわれる昨今であるが、理学部だって社会ですぐには役に立ちそうにない研究がたくさん行われていた。それはともかく、憧れを糧に歩んでいる人たちがここにもいたのだという安堵感を文学部で得た。

「夢のような時間」

さて、私自身は憧れを原動力に進んできただけで大した創造ができたわけではないが、冒頭で触れた「説」に関して、一人の学生の例を記そう。その学

生は沖縄のマングローブを研究して卒論を書いた。マングローブとは熱帯から亜熱帯にかけての海岸部に発達する植生で、その構成種は独特の樹形をなしているの、初めて見たときには宇宙人に会った時のような感激を味わう。このマングローブにとりつかれたA君は、南西諸島の島々を1カ月かけて巡り歩きながらマングローブの分布や出現種を調査した。自宅では何種類ものマングローブ植物の苗を購入して育てていたが、それは種の同定が難しい実生や幼木の段階でも、現場で種名が分かるようにするためであった。なかなか市販されていない種類までインターネットを駆使して手に入れていた。

A君の卒論は全国地理学卒業論文発表大会に参加する代表者に選ばれるほどの力作であった。年度末に発行しているゼミ論集の最後には、学生が一言ずつゼミ学習に関する感想を述べるページがあるが、たいていの学生は卒論の苦労話を書く。A君はそこに「1年間あっという間に時間が経ってしまいました。それもそのはずで、好きなことをやっていたからです。私はマングローブが大好きで、専修大学に入学しました。こんな夢のような時間はもうないと思います。調査中も鼻歌を歌いながらマングローブの林を歩いていたことを思い出します」と記したうえで、卒論は頑張るのではなく楽しんでほしいと後輩にメッセージを残した。もう私がここに書き足すことは何もない。

文学部の学びの庭で

文学部は「歴史が好きだから」とか「高校の現代文の授業が楽しかったから」とか、憧れを動機に入学してくる学生が少なくない。文学部で学ぶ学生が皆、将来専門家や研究者になるわけではないけれど、そうやって憧れを抱きながら探求する時間を過ごし創造することの喜びを味わうことは、長い目で見れば社会に「役立つ」ことにつながるであろうし、何よりも本人にとって生涯の財産になるはずである。

憧れは簡単には成就しないのが常であるが、どうか学生にはあきらめずに追い求めることを楽しんでほしい。私たちも、その憧れが創造へのエネルギーにうまく転化されるように手助けしながら学生たちとつき合っていきたいと思う。